

# 大学における新構想型学部に関する実態調査 (調査資料・データ 53)

第1調査研究グループ  
吉田 通治 神田 由美子 前澤 祐一

## 1. はじめに

### 1.1 調査目的

現在の日本における大学の学部のほとんどは、文系・理系のどちらかに分類され、またさらに各々が細分化されている。これらの専門指向型の学部は、学部間・学科間の壁が非常に高く、他の学部・学科の講義を受けることは非常に困難である。また最近では、この細分化(専門化)がさらに進んでいく傾向にある。

一方で、最近起こっている社会問題(環境問題、高齢化問題、臓器移植問題等)は、1つの専門分野の専門家では解決することは出来ない、様々な分野の要因が複雑に絡み合った大変難しいものとなっている。これらの問題を今後解決していくには、ある一つの専門分野の領域にとらわれない幅広い視野を持った人材の育成・活用や、各専門分野の専門家達による共同研究等が必要不可欠である。

また、日本の大学では4、5年前から大きな変革の波が押し寄せている。それは、これまでの日本の大学の伝統であった縦割り構造をうち破る、学際的な学部が増加してきているのである。つまり、これまでの理系・文系の専門学部とは違う、また文理学部とも違った、文系・理系の枠を越えた新しい構想の学部である(以後、これらの学部を「新構想型学部」と称する)。

これまで、「科学技術人材＝理系の人材」という図式が成り立ってきた。しかし、社会と科学技術との関わり合いが、今後より一層密接になってくると考えられ、また、社会がこのように大きく様変わりしてきていることから、この図式が成り立たなくなっている。従って、今後はこれらの新しいタイプの人材が、新たな科学技術人材として大きく期待されている。

しかし、現在のところ新構想型という定義はない。また、各大学のこのような新設学部における新たな試みの実態や、特色、学生の卒業後の進路等についてはよく把握されていないのが現状である。

そこで、本報告は、いくつかの大学の新構想型学部における状況や実態について、統計やインタビューを用いて調査を行ったものである。

### 1.2 調査内容

本報告書は、

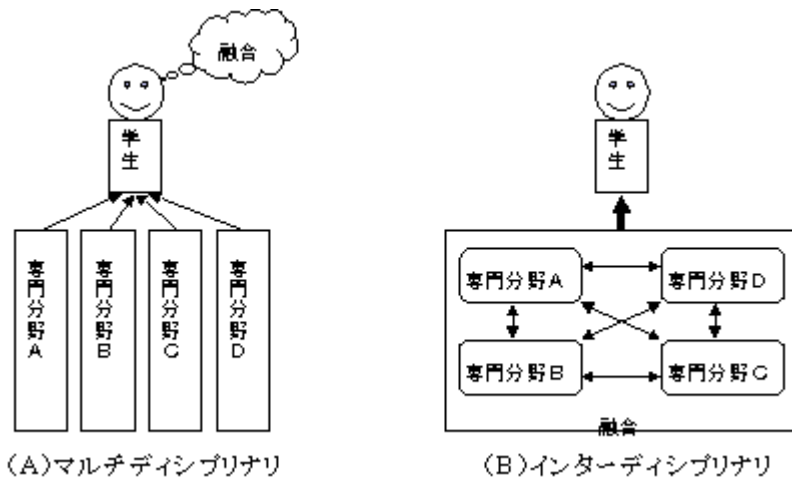
- 1) 「文部省 学校基本調査報告」による、学部入学志願者数、学部入学者数等の統計データと、
- 2) 実際にいくつかの大学を訪問して行った、学部の実態に関するインタビュー調査を行った結果の報告である。

新構想型学部とは何か

学際化が成立するには、その前提として確立された学問の専門分野が必要である。従って、学際化とは、既存の学問の専門分野を相互に関連づけることである。しかし、学問の学際化といってもその手法は様々である。その中で、いま日本の大学が取り組んでいる学際化の手法は大きく分けると、マルチディシプリナリ(Multi-disciplinary)とインターディシプリナリ(Inter-disciplinary)の2つに分けられる。

ここで、マルチディシプリナリとは、複数の学問の専門分野を学生が学び、学生自身の中で融合されるものである(図1-1(A)参照)。また、インターディシプリナリとは、複数の学問の専門分野が相互作用し、新しい構造の知識体系の構築がなされたもの(融合されたもの)を、学生が学ぶものとする(図1-1(B)参照)。

図1-1 マルチディシプリナリとインターディシプリナリ



最近、新設される学際的な学部や、新たな学部としての試みとして行われている学際化の多くは、マルチディシプリナリ的手法であり、主として文系の専門分野と理系の専門分野が複合している。従って、本報告で扱う新構想型学部は、マルチディシプリナリ的手法で学際化の試みを行っている学部に限定する。

### 新構想型学部の選定

新構想型学部を持つ国公立大学と私立大学の大学および学部名は、「文部省 学校基本調査報告書」より、日本の大学の全学部名の中から、既存の専門学部の名称には現れることのない、総合、人間、情報・コミュニケーション、環境をキーワードに持つ学部を抽出し、学部設立の経緯や教育理念等から選定した、49大学52学部である。「文部省 学校基本調査報告」では、これらの新しいタイプの学部は既存の学問分野の中に組み入れて計上しているの、個別に集計する以外にこれらの学部の統計は存在しない。従って、本調査では選定した学部をもとに「文部省 学校基本調査報告」を用いて集計を行った。ただし、同名の学部の中には新構想型学部に該当しない学部も存在するが、統計上これらの学部も含まれるとする。また、逆に名称の上では既存型学部に分類されるが、内容的には学際的な学部も存在する。しかし、それらの学部は今回の調査から除外されている。このカテゴリーの代表的なものは教養学部である。また、理学部や工学部でも部分的には学際化現象が見られる。これらの学部の解明には、学科ないし専攻レベルでより詳しく見ていく必要がある。

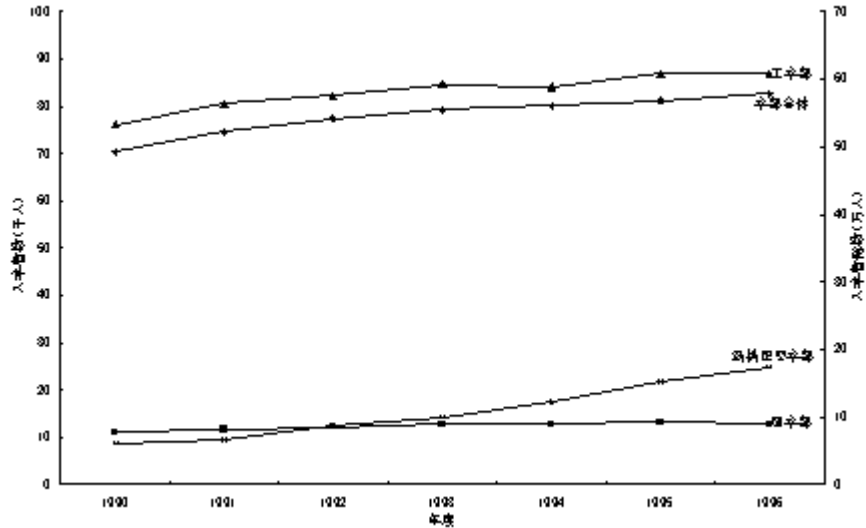
訪問大学はこの中から、学部から卒業生がでている(又はでる)事を条件として、7校8学部を選定した。

## 2. 調査結果の概要および考察

文部省「学校基本調査報告」による統計、および各大学におけるインタビュー調査の結果から、日本の新構想型学部の現時点における実態は、以下の通りである。

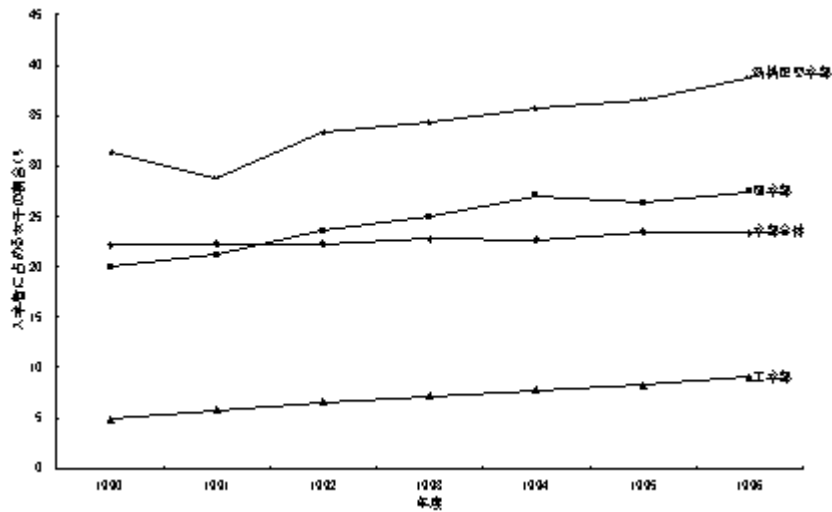
- 最近新設されている学部は、1991年6月の文部省における「大学設置基準等の大綱化」に伴い、既存の教養部の改組や現在の社会問題に対応できる人材の育成を目的に誕生している(新構想型学部のなかで、1992年度以降に新設された学部の割合は74%である)。これらの新設学部の多くは、学際的な学部であり、学際化の手法はマルチディシプリナリである。
- 新構想型学部は、大きく分けて総合系学部、人間系学部、情報・コミュニケーション系学部、環境系学部の4つに分類することができる。
- 新構想型学部の新設が各大学で相次いでおり、必然的にその入学志願者数、入学者数の絶対数は増加傾向にある。特に、総合系学部、人間系学部、情報・コミュニケーション系学部の増加率が大きい。既存の専門学部である理・工学部においては、ほぼ横ばいである。

図2-2 理工学部と新構想型学部の入学者数の比較



- 新構想型学部に対する女子学生の人気は、既存の専門学部である理学部や工学部と比較すると断然高い。新構想型学部の入学者に占める女子の割合は約40%であり、理・工学部は10%前後である。しかし、女子割合の値は新構想型学部の方が高いものの、過去7年間に於ける増加率の伸びは理・工学部の方が大きい。

図2-3 理・工学部と新構想型学部の入学者における女子割合の比較



- 新構想型学部の入学倍率は、どの学部も新設された初年度の値は高い傾向にあり、その後徐々に落ち着くため、7年間の経過を見ると減少傾向になりがちである。しかし、新構想型学部の値の方が、既存の専門学部である理学部や工学部の値と比較すると高い。
- 新構想型学部の学際的試みには3つある。

- 1) 在学中の4年の間になるべく多くの他分野の学問を学ばせ、学校卒業後、新たな社会の変化に臨機応変に対応していくことの出来る学生を育てる。
  - 2) 学生自身が問題意識を持ち、自分でその問題解決を行うことができる、問題解決型の学生を育てる。
  - 3) 学部内の文系・理系の教授達が共同で学際領域の問題解決に取り組む。
- ・新構想型学部の大きな利点は、入学してから自分の進路について意志決定が出来るところである。しかし反面、意志決定が出来ない学生には、この利点が不利になることもある。

- 新構想型学部卒業生の中で就職を希望する学生は、自分の進路について意志決定が出来ている場合が多いので、企業の規模や名前にこだわることなく、自分のやりたいことが出来る分野への就職が決定している学生が多い。しかし、就職活動時に学部の社会的認知度の低さや企業の既存の文系・理系といった縦割り構造の残存により、不利を被っている学生もいる。
- 新構想型学部は、文系・理系の学科の講義を相互に受けることが可能なカリキュラム構成にすることにより、マルチディシプリナリによる学際教育を行っている。インターディシプリナリという、1つの学部で学際理念に基づいた教育を行う手法もあるが、このような複合領域の教育が行える教授自体まだ極めて少数であり、今後これらの専門家を増加させていくために、早期の体制の整備・拡充が望まれる。
- 新しい試みの学部であるため、様々なミスマッチが学部と学生の間で生じる場合がある。この場合、学部側ではなるべく多くの学生に学部の理念を理解してもらい、学んでもらうために、いろいろな対応策を講じて学生に対応している。
- 学際という新しい領域の学問をどのように今後発展させていくかという事を、各学部で試行錯誤している。それは、新構想型学部自体の独自性を強調していくことでもあるが、大学院を含めた教育・研究体制の早期確立が大きな課題である。
- 学部段階の学際には、主にマルチディシプリナリとインターディシプリナリの手法がある。マルチディシプリナリの利点は、学生自身に学ぶ学問の選択肢があり、意志決定が出来ることである。インターディシプリナリは、新しい体系の学問分野を学ぶ場であるので、その時点で既存の専門分野と変わらないということになり、マルチディシプリナリの利点である学生の自由度は失われてしまう恐れがある。

これらのことから、新構想型学部とは、まだ出来て間もない学際領域を学ぶ場所であり、新しいが故に様々な問題を抱えているのが実状である。しかし、いま起こっている学際領域の社会問題を解決する上で、これらの知識を持つ人材の育成は必須である。また、大学入学までの受験戦争を乗り切ったあとに、自分を見つめ直す時間があることは、個人の個性をより伸ばすことができ、新構想型学部の大きな利点の1つである。

このように、新構想型学部は将来にむけて大きな期待がかかる学部である。その為にも、これまでに挙げた課題を克服し、学際領域を学ぶ場として、土台をしっかりと築いていかねばならない。このような観点から、今後関連する調査研究および、議論がさらになされることを期待する。